

林 氏

朝鮮總督報告韓國併合始末

內閣總理大臣侯爵桂太郎

明治四十三年十一月二十一日



朝鮮總督報告韓國併合始末
內閣總理大臣侯爵桂太郎
明治四十三年十一月二十一日



朝鮮總督報告韓國併合始末

右謹予御覽ニ供ス

明治四十三年十一月二十一日

內閣總理大臣侯爵桂太郎

月

月

明治四十三年十一月九日

内閣書記官



内閣總理大臣

木

内閣書記官長

西

朝鮮總督報告韓國併合始末

P

長

韓韓總督府台韓國併合始末

内閣總理大臣

内閣書記官

海

明治四十三年十一月七日

内閣書記官

海

書記官長

書記官

秘

明治四十三年十一月七日

朝鮮總督子爵寺内正毅

寺内正毅印

内閣總理大臣侯爵桂太郎殿

韓國併合ノ顛末ニ関シテハ曩ニ以口頭
及報告候得共尚ホ別冊韓國併合
始末供高覽候也

七二

統

左

子

韓國併合始末

朝鮮總督府

新 監 序

0000 0714

本官ハ 聖旨ヲ奉體シ去ル七月二十三日韓國
ニ着任シテヨリ以來既ニ確定セル方針ニ基キ
時機ヲ計リテ併合ノ實行ニ着手セムト欲シ一
方ニ於テ準備ノ歩ヲ進ムルト同時ニ竊カニ韓
國上下ノ狀況ヲ觀測スルニ孰レモ大勢ノ進運
ニ鑑ミ難局救濟ノ爲ニハ到底根本的改革ノ避
クヘカラサル事理ヲ覺悟セルモノノ如クナリ
シモ唯當局者ハ皇室ノ待遇ト輔相以下政府職
員ノ處分トニ關シ稍疑懼ノ念ヲ懷キ或ハ時局

解決ノ責任ヲ推諉セムトスルノ狀アリ依テ本
官ハ間接ノ徑路ニ由リ我々 天皇陛下ノ寛仁ニ
シテ其ノ政府ノ公明ナル皇室及輔相ハ勿論韓
民全般ノ處世狀態ヲ一層安全ニシテ幸福ナル
地位ニ置クトモ今日以下ノ苦境ニ陥ラシムル
カ如キコトハ決シテ有リ得ヘカラサル理由竝
ニ韓國内閣員ニシテ其ノ職ヲ去ルトモ帝國政
府ノ決意ヲ實行スルニハ何等ノ支障ナカルヘ
ク而シテ其ノ退避ノ行爲ハ却テ當局者及國家
ニ不利益ナル結果ヲ來スニ過キサル事情ヲ了

解セシムルコトニ努メタリ於是内閣總理大臣
李完用ハ釋然悟ル所アリ自ラ時局解決ノ衝ニ
當ラムトスルノ決心アルコトヲ確メ實行ノ時
機漸ク成熟セリト認メタルニ依リ八月十六日
ヲ以テ内閣總理大臣李完用ヲ統監邸ニ招キ先
ツ帝國政府ハ韓國ヲ擁護セムカ爲メ既ニ前後
ニ回ノ大戦ヲ賭シ數萬ノ生靈ト幾億ノ財帑ト
ヲ犠牲ニ供シ爾來帝國政府ハ誠意ヲ傾ケテ韓
國ノ扶翼ニ勗メタリト雖當時ノ如キ複雑ノ制
度ニテハ到底施政改善ノ目的ヲ全ウスル能ハ

サレヲ以テ將來韓國皇家ノ安全ヲ保障シ且韓
民全般ノ福利ヲ増進セムカ爲ニハ兩國相合シ
テ一體ト成リ以テ政治機關ノ統一ヲ圖ルノ外
ナキ理由ヲ説示シ又皇室ノ優遇及功勞アル韓
人ニ對スル恩典竝ニ將來ニ於ケル施政ノ方針
ニ關シ深仁厚德ノ 叡慮ヲ傳ヘタル上尚ホ併
合ノ事タル古今ノ歴史ニ徵シ其ノ例尠カラズ
或ハ威壓ヲ以テ之ヲ斷行シ或ハ宣言書ヲ公布
シテ協約ヲ用ヒサルモノアリ然レトモ日韓從
來ノ關係ニ顧ミ且今後兩國民ノ輯睦ヲ圖ル上

ニ於テ斯ノ如キ手段ニ訴フルハ甚タ好マシカ
ラサル所ナルカ故ニ這般ノ時局解決ハ和衷協
同ヲ以テ之ヲ實行シ其ノ間秋毫ノ隔意ヲ挾ム
ヘカラサルヲ要ス而シテ其ノ形式ハ合意的條
約ヲ以テ相互ノ意思ヲ表示スルヲ妥當ナリト
認ム依テ今其ノ大要ヲ列舉シ考量ノ便宜ニ資
セムカ爲ノ覺書ヲ作り置ケルニ付之ニ由リ大
體ノ方針ヲ了解セラレタキ旨ヲ述ヘ左ノ覺書
ヲ提示セリ

日韓兩國ハ境土相接シ人文相同シク古來吉

凶利害ヲ俱ニシ終ニ分離スヘカラサルノ關係ヲ有セリ是レ帝國力敢テ前後二回ノ大戰ヲ賭シ數萬ノ生靈ト幾億ノ財帑トヲ犧牲ニ供シ以テ韓國ヲ擁護シタル所以ナリ爾來帝國政府ハ孜孜トシテ韓國ノ扶掖ニ盡瘁シタリト雖現在ノ如キ複雑ナル制度ニテハ到底韓國皇室ノ安固ヲ恒久ニ確保シ且韓民全般ノ福利ヲ完全ニ保護スル能ハサルニ依リ茲ニ兩國相合シテ一ト成リ彼我ノ差別ヲ撤去シ以テ韓國ノ統治機關ヲ統一スルヲ以テ相

互ノ便益ト認メタリ故ニ日韓ノ併合ハ彼ノ戰爭又ハ敵對ノ結果ヨリ生スルカ如キ事態ト同視スヘカラサルハ勿論寧口和氣靄々タル間ニ協定ヲ遂クヘキモノニシテ韓皇陛下ハ時運ノ趨勢ニ鑑ミ自ラ進ムテ其ノ統治權ヲ我々天皇陛下ニ讓與セラレ其ノ位ヲ去リテ將來萬全ノ位地ニ就カルヘク尚ホ現皇帝陛下、太皇帝陛下、皇太子殿下其ノ他各皇族ノ康寧ト韓民上下ノ福利トヲ保障セムカ爲メ一ノ條約ヲ締結セラルルコトトナルヘシ其

、條約中ニハ大略(一)現皇帝、太皇帝兩陛下
及皇太子殿下竝ニ其ノ后妃及後裔ハ相當ナ
ル尊稱、威嚴及名譽ト之ヲ保持スルニ充分ナ
ル歳費トヲ受ケラルルコト(二)其ノ他ノ皇
族ニモ現在以上ノ優遇ヲ賜ハルコト(三)勲
功アル韓人ニハ榮爵ヲ授ケ之ニ相當スル恩
賜金ヲ與フルコト(四)日本國政府ハ全然韓
國ノ統治ヲ擔任シ法規ヲ遵守スル韓人ノ身
體及財産ニ對シ充分ナル保護ヲ與ヘ且其ノ
福利ノ増進ヲ圖ルコト(五)誠實ニ新制度ヲ

尊重スル韓人ハ之ヲ朝鮮ニ於ケル帝國官吏
ニ任用スルコト等ヲ規定セララルヘシ
茲ニ貴大臣ノ參考ニ供スル爲メ條約締結ヨ
リ生スル結果ノ概要ヲ述ヘ置クヘシ先ツ現
皇帝陛下ハ統治權ヲ讓ラルルト同時ニ太公
殿下ノ尊稱ヲ授ケラルヘク皇太子殿下ハ其
ノ世嗣トシテ公殿下ノ稱ヲ賜ヒ相續ノ上ハ
太公ト爲ラレ子々孫々世襲スヘキモノニシ
テ太公家ハ永久ニ存續スルコトトナルヘシ
太皇帝陛下ハ現今ト雖退隱ノ御身ニシテ別

ニ一家ヲ立テラルル思召ナキハ勿論ナレト
モ特ニ恩典ヲ以テ其ノ一代ハ現皇帝陛下ト
同シク太公殿下ノ尊稱ヲ授ケラレ三方トモ
日本皇族タル禮遇ヲ賜ハルヘシ前述ノ尊稱
ハ現今ヨリハ稍降レルカ如シト雖史ヲ案ス
ルニ此ノ國歷代ノ王朝ハ終始正朔ヲ隣國ニ
奉シ近ク日清戰役前後迄ハ王殿下ト稱セラ
レ其ノ後日本國ノ庇護ニ依リ獨立ヲ宣布シ
始メテ皇帝陛下ト稱セラレタルニ過キサレ
ハ今太公殿下トシテ日本皇族ノ禮遇ヲ受ケ

ラルルハ之ヲ十數年以前ノ地位ニ比シ必ス
シモ劣等ナリト謂フヘカラス之ヲ以テ數百
年來ノ尊嚴ヲ激變スルモノト認ムルカ如キ
ハ無替ノ甚シキモノナリ殊ニ從來現皇帝太
皇帝兩陛下及皇太子殿下ノ受ケ居ラルル宮
廷費ハ毫釐モ減少スルコトナク其ノ全額ヲ
右三方ニ供給セララルヘキ我々天皇陛下ノ聖
旨ナルヲ以テ今後ト雖現在ト同様ニ富裕ナ
ル生計ヲ營マルルノミナラス太公トシテ日
本皇族タル禮遇ヲ受ケラルルニ於テハ爾後

何等ノ變故ニ遭フノ患ナクシテ永久ニ安全
且鞏固ナル地位ヲ得ラルヘシ又既ニ現今ト
同額ノ歳費ノ給與ヲ受ケラルルカ故ニ從來
ノ宮内府、承寧府其ノ他皇室附各官ハ其ノ職
名ニハ變更ヲ來スヘキモ依然其ノ地位ニ在
リテ從前ト同シキ俸祿ヲ受クルコトヲ得ヘ
シ
義親王以下ノ各皇族ハ其ノ從來ノ格式ニ應
ジ公侯伯等ノ榮爵ヲ授ケラレ其ノ歳費ハ孰
レモ現在ノ定額ヨリモ増加セラルル筈ナレ

ハ今日ヨリモ一層豊富ナル歳入ヲ我々 天皇
陛下ヨリ賜ハリテ充分ニ其ノ體面ヲ維持ス
ルヲ得ラルルコトトナルヘシ
現内閣大臣ニシテ其ノ有終ノ職責ヲ盡シ圓
満ニ時局ノ解決ヲ遂行スルニ於テハ持ニ他
ニ擢ヒテテ特別ノ恩賞ヲ賜ハリ榮爵ヲ授ケ
ラレタル上終生幸福ナル生活ヲ爲スニ足ル
ヘキ賜金ヲ與ヘラルルノミナラス皆中樞院
ノ顧問ニ任セラレ將來ノ施政上諮詢ヲ受ク
ルノ名譽ヲ擔フヲ得ヘシ其ノ他現在ノ親勅、

奏判任官、元老前大臣等ニ對シテモ各其ノ等
差ニ應シテ夫々恩典ヲ賜フヘキハ勿論一般
士民ニ對シテモ亦各其ノ生業ヲ得セシメム
カ爲メ授産基本金ヲ頒賜セラルヘシ
條約締結ノ順序トシテ貴大臣ハ先ツ閣議ヲ
纏メタル上韓皇陛下ニ如上ノ趣旨ヲ言上シ
條約締結ノ爲メ全權委員ノ任命ヲ奏請セラ
ルヘシ而シテ貴大臣ト本官トハ其ノ職責上
條約締結ノ大任ニ當ルヘキハ勿論ナリ抑此
條約タルヤ日韓親善ノ極致ニ成リ其ノ進

運ニ貢獻スルモノナルカ故ニ其ノ局ニ當ル
者ハ互ニ丹誠ヲ披瀝シ和衷協同以テ其ノ職
責ヲ全ウスルヲ要ス惟フニ韓皇陛下ハ天資
雍熙能ク大局ニ順應スルノ盛徳ヲ具ヘラレ
又貴大臣ヲ首相トスル現内閣ノ各員ハ孰レ
モ識度高邁濟時ノ略アリ必スヤ我々天皇陛
下ノ宏謨ニ信賴シテ其ノ出處ヲ愆ルコトナ
カルヘキハ本官ノ確信シテ疑ハサル所ナリ
内閣總理大臣李完用ハ本官ノ説明ヲ聞キ且覺
書ヲ一讀シタル後韓國ノ現状カ百事頽廢ニ歸

シ自ラ刷新スルノ力ナク何レノ國ニカ倚ラサ
ルヲ得サルハ今更多言スルノ要ナク而シテ日
本國ヲ措イテ他ニ其ノ扶掖ノ任ニ當ルヘキモ
ノナキハ列國ノ均シク認ムル所ナリ曩ニ併合
問題ノ世間ニ唱道セラルルヤ其ノ說一ナラス
自分等ハ其ノ果シテ如何ナル形式ニ於テ決行
セラルルヤヲ揣摩スルニ苦ミシカ今日始メテ
其ノ詳細ヲ確知スルヲ得タリ唯此ノ機ニ於テ
希望スル所ハ國號及皇帝ノ尊稱ニ關シ少シク
考慮ヲ煩ハシタキコトアリ即チ國號ハ依然韓

國ノ名ヲ存シ皇帝ニハ王ノ尊稱ヲ與ヘラレタ
キコト是ナリ蓋シ此ノ事タル主權ナキ國家及
王室トシテハ單ニ形式ニ過キサレトモ一般人
民ノ感情ニ影響スル所鮮少ナラサルモノアリ
嘗テ韓國カ清國ニ隸屬シタル時代ニ於テモ猶
ホ國王ノ稱號ヲ存シタル歴史アリ故ニ王號ヲ
與ヘラレ其ノ宗室ノ祭祀ヲ永久ニ存續セシメ
ラレナハ人心ヲ緩和スルノ一方便トナリ所謂
和衷協同ノ精神ニモ副フコトナラムト信スル
旨ヲ縷述セリ

本官ハ之ニ答ヘ是レハ單ニ韓國側ノ事情ヨリ
觀レハ一應至當ナルカ如キモ凡ソ一般ノ國際
關係ニ徵スレハ既ニ併合實行後ニ於テ王位ヲ
存續スルノ理由ナキノミナラス又其ノ必要ア
ルヲ認ムル能ハス殊ニ之ヲ存續スルトキハ却
テ將來ニ禍根ヲ貽シ李氏ノ宗室ヲ永久ニ安全
ナラシムル所以ニ非サルカ故ニ瑣々タル情實
ニ拘泥セス寧口斷然名實ノ分界ヲ明確ニシ將
來紛淆ヲ醸スカ如キ淵源ヲ杜絶スルニ如カス
況ンヤ世界何レノ國ト雖主權ヲ有セサル者カ

王位ヲ歷世ニ繼承スルノ例ナキニ於テヤ我
政府ハ慎重ノ審議ヲ盡シ且我々至尊ノ特旨ニ
依リ太公殿下ノ尊稱ヲ賜フコトニ決定シタル
モノニシテ是レ時局解決ノ上ニ於テ最モ重キ
ヲ置キタル所ナル旨ヲ説示セリ
李完用ハ之ヲ傾聽シ自分ノ希望ニシテ帝國政
府ノ容ルル所トナラサルニ其ノ主張ヲ固守ス
ルニ於テハ遂ニ妥協ノ趣旨ト相副ハサルニ至
ルヘシ然レトモ自分ノ立場トシテ皇帝ノ尊稱
ヲ太公トセララルコトニ對シ此ノ席ニ於テ直

ニ應諾スルハ困難ナルニ依リ退イテ篤ト熟考
スルコトニ致シタキ旨ヲ答ヘタリ
本官ハ太公ナル尊稱ハ日本國ニ於テ嘗テ之レ
無キモノニシテ實ニ特例ニ屬スレトモ外國ニ
於テハ王稱ニ優ルトモ劣ルモノニ非サル旨ヲ
説明シ篤ト熟考ヲ加ヘラレタシト告ケ尚ホ覺
書以外ノ別案トシテ地方ノ兩班ニ對スル授產
基金分配ノ方法等ヲ詳述セリ
李完用ハ國號及王稱ノ問題ハ自分ニ於テ承諾
スルヲ難シトスルノミナラス閣員一同モ亦同

一ノ感想ヲ有スルハ勿論ナリト信ス之ヲ同僚
ニ協議スルニ方リ彼等ニシテ之ニ同意セサル
ニ強ヒテ之ヲ説服セムトセハ機密漏洩ノ虞アリ
能ク秘密ヲ守リ自分ヲ幫助スル者ハ閣員中
農商工部大臣趙重應アルノミ因テ先ツ之ト協
議シ其ノ結果ハ時々彼ヲ通シテ交渉セムトス
蓋シ直接ノ談判ハ却テ世人ノ耳目ヲ惹クニ至
ルヘケレハナリト述フ

本官ハ之ヲ承諾シ且首相及閣員ノ立場ヨリセ
ハ皇帝ヨリ時局解決ニ必要ナル勅命ヲ下サレ

其ノ勅旨ニ基キ條約締結ノ任ニ當ルコトトセ
ハ是レ正式ノ順序ニシテ又閣員ノ苦難ヲ輕減
スルノ途ナルヘキコトヲ注意シ李完用ハ之ヲ
諒トシテ退出セリ

同日午後九時ニ至リ農商工部大臣趙重應本官
ヲ來訪シ内閣總理大臣李完用ト協議ノ結果ヲ
齎ラシ大體ニ於テハ異議ナキモ國號タケハ保
存シタシ古來ノ歴史ニ顧ミルモ國號迄モ失フ
ニ至リテハ著シク韓國上下ノ感情ヲ害シ紛擾
ヲ來スコトナキヲ保シ難シ王稱ニ至リテモ古

來ノ歴史ニ照ラシ曩ニ清國ニ隸屬シタル時代
ニ用ヒタル稱號ヲ其ノ儘踏襲セムトスルニ外
ナラス太公ナル稱號ハ世界ノ事例ヨリ觀レハ
美ナラムモ韓國ノ事情ハ之ニ異ルモノアルニ
依リ可成ハ王稱ヲ與ヘラレムコトヲ希望ス若
シ此ノ二點ニシテ雙方ノ意思一致スルヲ得サ
ルニ於テハ妥協ノ途ナキニ苦シム旨ヲ内閣總
理大臣ノ命ニ依リ傳達スト述ヘタリ
本官ハ之ニ對シ李完用ニモ詳説ニ置キタル通
リ本案ハ我廟議ノ決定スル所ニ係リ本官ハ統

監トシテ勅命ヲ奉シ其ノ實行ノ任ニ當ルモノ
ニシテ可成韓國ノ事情ニ適應スルノ措置ニ出
テムカ爲メ覺書所載ノ如キ方法ヲ執ラムトス
ルニ外ナラス故ニ將來永ク彼我ノ畛域ヲ遺シ
之カ爲メ重ネテ紛雜ヲ釀スカ如キ措置ハ斷シ
テ之ヲ排除セサルヘカラス是レ特ニ注意ヲ要
スル所ナル旨ヲ説示シ尤モ國號ハ帝國政府ニ
於テモ之ヲ朝鮮ト改ムル筈ナレハ此ノ點ニ關
シテハ彼我ノ間ニ懸隔ナキコトヲ告ケタルニ
趙重應ハ朝鮮ノ名ヲ存セラルルニ於テハ誠ニ

幸ナリ願ハクハ王稱ヲモ保存セラレタキ旨ヲ
切望セリ於是本官ハ更ニ其ノ意思ヲ確メムカ
爲メ左ノ通り筆記シテ之ヲ示シ且是ハ廟議ニ
於テ決定シタルモノヲ變更スルカ故ニ帝國政
府ニ稟議スルヲ要スル旨ヲ告ケタリ

- 一 韓國ノ國號ヲ自今朝鮮ト改ムルコト
- 二 皇帝ヲ李王殿下、太皇帝ヲ太王殿下及皇太子ヲ王世子殿下ト稱ス

趙重應ハ右ニテ可ナラムト認ムレトモ一應内閣總理大臣ト協議シ可否ヲ確答スヘシトテ退

出セリ

翌十七日午前十時内閣總理大臣李完用ヨリ閣員ニ協議スルノ必要アルニ依リ同日午後八時迄確答ヲ猶豫セラレタキ旨ヲ申出テ更ニ同時刻ニ至リ李完用ハ終日閣員ト協議シタルモ未タ全員ノ同意ヲ得ルニ至ラス然レトモ國號及王稱ニ關スル自分ノ主張ニシテ帝國政府ノ容ルル所トナラハ自ラ責ヲ負ウテ閣議ヲ統一スルコトニ盡カスヘキ旨ヲ通告シ來レリ
仍テ本官ハ國號ヲ朝鮮ト改ムルコトハ當方ニ

於テ既ニ異議ナキ所又韓國皇帝カ統治權ヲ讓與シタル後ニ至リ朝鮮王ト稱セスシテ單ニ李王ノ隆稱ヲ賜ハルモ將來何等ノ支障ナカルヘシト認メ直ニ帝國政府ニ電稟シ翌十八日之ニ對スル裁可ヲ得タルニ依リ其ノ趣ヲ李完用ニ傳達シ既ニ此ノ兩件ニ付當方ニ於テ同意シタル以上ハ進ムテ閣員ノ意見ヲ纏メ條約ノ締結ニ着手スヘキ旨ヲ注意シ且條約案ヲ提示シテ之ニ詳細ノ説明ヲ加ヘ尚ホ韓國皇帝ハ内閣總理大臣ヲ條約締結ノ全權委員ニ任命セララル

ヲ以テ正式ノ順序ト爲スカ故ニ左案ノ趣旨ニ依リ勅命ヲ發セラルヘキ必要アルコトヲ告ケ置ケリ

朕東洋ノ平和ヲ鞏固ニセムカ爲、日韓兩國ノ親善ナル關係ニ顧ミ相合シテ一家トナルハ相互萬世ノ幸福ヲ圖ル所以ナルヲ念ヒ茲ニ韓國ノ統治ヲ舉ケテ之ヲ朕カ最モ信賴スル大日本國皇帝陛下ニ讓與スルコトニ決シテ依テ必要ナル條章ヲ規定シ將來ニ於ケル我皇室ノ安寧並ニ生民ノ福利ヲ保障セムカ

爲メ内閣總理大臣李完用ヲシテ大日本帝國統監寺内正毅ト會同シ商議協定セシム之ヨリ先キ韓國政府ニ於テモ我カ和衷協同ノ誠心ヲ諒トシ合意的條約ノ締結ニハ殆ト異論ナキノ狀アルヲ認メタルニ依リ條約ニ依ル能ハサル場合ニ發スヘキ宣言書ハ無用ニ歸スヘキノミナラス本官ノ携帶セル條約案前文ヲ左ノ通り修正スルヲ妥當ナリト信シ之ニ對シ豫メ裁可ヲ仰キタリ

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ハ兩國間ノ

韓
總
督
府

特殊ニシテ親密ナル關係ヲ願ヒ相互ノ幸福
ヲ増進シ東洋ノ平和ヲ永久ニ確保セムコト
ヲ欲シ此ノ目的ヲ達セムカ爲ニハ韓國ヲ日
本帝國ニ併合スルニ如カサルコトヲ確信シ
茲ニ兩國間ニ併合條約ヲ締結スルコトニ決
シ云々

李完用ハ條約ノ規定ヲ閱悉シタル上全然之ヲ
承認シ農商工部大臣趙重應ニ命シ十八日ノ内
閣會議ニ於テ内部大臣朴齊純及度支部大臣高
永喜ニ懇説セシノ漸ク其ノ同意ヲ得タレトモ

學部大臣李容植ハ頑冥ニシテ初ヨリ併合ニ反
對シ君辱臣死トノ歎聲ヲ發シ到底之ヲ説服ス
ルニ由ナキヲ以テ不日開カルヘキ御前會議ニ
於テ其ノ決意ヲ促スノ外ナシト認メタルモ若
シ公然異議ヲ唱フルカ如キコトアリテハ外形
上圓滿ヲ缺クノ嫌アルヲ以テ李完用ハ彼ヲシ
テ學事視察等ノ名義ヲ以テ地方ニ旅行セシム
ルニ如カストノ意見ヲ抱キ其ノ結果表面水害
見舞トシテ本邦ニ特派スルコトニ決シタリ
十九日李完用ハ更ニ宮内府大臣閔丙奭及侍從

院卿尹德榮ヲ招キ時局解決ノ大要ヲ説キタル
モ或ハ機密ヲ洩ラシ物議ヲ起スノ端ヲ啓カム
コトヲ恐レ細目ニ涉ルヲ避ケ其ノ内意ヲ探ル
ニ止メ未タ全ク其ノ同意ヲ得ルノ程度ニ達セ
サリシカ如シ

二十日李完用ハ更ニ承寧府總管趙民熙ヲ招キ
太皇帝ノ昨今ニ於ケル言動ヲ問ヒ且不日實行
セラルヘキ時局解決ニ關シ其ノ注意ヲ促シテ
諸般ノ打合ヲ了シ又趙民熙ヲ通シテ親衛府長
官李秉武ニ御前會議ノ内容ヲ示シテ之ニ同意

セシメ又興王李裒及中樞院議長金允植ニモ内
談ヲ遂ケテ其ノ同意ヲモ得テ御前會議ニ於ケ
ル準備ヲ爲セリ尤モ曩ニ水害見舞トシテ特派
ヲ命セラレタル李容植ハ前日ヨリ下痢症ニ罹
リ急ニ出發シ能ハサルニ依リ餘人ヲ以テ代ラ
シメラレタキ旨ヲ申出テ遂ニ御前會議ニモ出
席セサルノ狀アリ

二十一日小宮宮内府次官ノ申報ニ據レハ宮内
府大臣閔丙奭及侍從院卿尹德榮ハ其ノ翌日ヲ
以テ開カルヘキ御前會議ノ順序竝ニ韓國皇帝

ノ全權委員任命ニ關シ未タ充分ニ了解シ居ラ
サルノ狀アリ因テ先ツ統監秘書官國分象太郎
ヲ兩人ノ自邸ニ遣ハシ時局問題ノ經過ヲ説明
セシメ且此ノ上ハ能ク皇帝ト内閣トノ間ニ於
ケル聯絡ヲ保チ諸事遺漏ナキ様措置スヘキ旨
ヲ注意セシメ置キタルモ尚ホ内閣總理大臣李
完用ハ宮内府大臣及侍從院卿ニ詳細ノ事實ヲ
開示スルトキハ機密ヲ漏洩シ或ハ皇帝及太皇
帝ヲ介シテ物議ヲ惹起スルヤモ測ラレサルコ
トヲ懸念シ今日迄熟議ヲ遂クルニ至ラス萬一

宮内府大臣及侍從院卿ニシテ俄ニ其ノ態度ヲ
一變シ爲メニ條約ノ締結ニ必要ナル全權委任
ノ勅書ヲ發セラレサルモ知ルヘカラス此ノ場
合ニ於テハ止ムヲ得ス條約案ヲ觀覽ニ供シ御
裁可ヲ仰キテ調印ヲ了スルノ外ナク是ハ舊來
ノ慣行ニ照ラシ必スシモ違例ニ非スト思惟ス
ルモ斯カル事態ヲ避ケ總テ圓滿ニ執行シタキ
ニ依リ統監ヨリ右兩人ヲ説得セムコトヲ希望
セル趣ヲ聞知シタルヲ以テ本官ハ御前會議ノ
當日二十二日午前十時ヲ期シ宮内府大臣閔丙

夷及侍從院卿尹德榮ヲ官邸ニ招キ時局解決ノ
問題カ今日迄總テ圓滑ニ進行シタル大要ヲ擧
ケテ之ヲ説明シタル上今ヤ既ニ條約締結ノ時
期ニ達シタルニ依リ皇帝ハ本日ノ御前會議ニ
於テ其ノ決意ヲ宣示セラレ内閣總理大臣ヲ全
權委員ニ任命セラルルヲ順序トス是レ圓滿ノ
解決ヲ遂クル上ニ於テ最モ重要ナル手續ナル
カ故ニ豫メ右ノ趣ヲ執奏シ時ニ及ムテ支吾ナ
キコトヲ期スヘキ旨ヲ忠告シ曩ニ内閣總理大
臣ニ示シタル全權委任ニ關スル勅書案ヲ手交

シ且國號及王稱ニ關シテハ内閣總理大臣及閣
員ノ希望ニ依リ帝國政府ノ同意シタル事情ヲ
ニ説示セリ

関尹兩人ハ其ノ責ニ任スルノ困難ナル事情ヲ
申出タルモ遂ニ本官ノ忠告ヲ了承シ直ニ參内
奏聞スヘシト答ヘ尚ホ皇室ノ歳費及宮内府ノ
處分ニ關シニ三ノ疑問ヲ質シタルニ依リ本官
ハ之ニ對シ詳細ノ説明ヲ爲シ尚ホ諸事打合ノ
便ヲ與ヘムカ爲メ國分秘書官ニ命シテ同行セ
シメタリ

閣尹兩人ハ直ニ參内シ午前十一時皇帝ニ内謁
シ約三十分間伏奏スル所アリ退出ノ後國分秘
書官ニ告ケタル所ニ據レハ兩人ヨリ本官ノ注
意セル要點ヲ止聞ニ達シタルニ陛下ハ大勢既
ニ定マリタル以上ハ速ニ實行スルニ如カサル
ヲ以テ本日午後一時ヲ期シ國務大臣ハ勿論皇
族ヲ代表スヘキ興王李燾元老ヲ代表スヘキ中
樞院議長金允植侍從武官長李秉武等ヲ御前ニ
召スヘキ勅命ヲ下サレタル趣ナリ

同日午後一時内閣總理大臣李完用ハ内部大臣

朴齊純度支部大臣高永喜及農商工部大臣趙重
應ト共ニ參内シ侍從武官長李秉武次テ來リシ
カ當日ハ恰カモ興王ノ誕辰ニ該當シ祝宴ヲ開
キ居リシ爲ノ興王李燾中樞院議長金允植等ハ
少シク遅レテ到レリ午後二時皇帝ハ宮内府大
臣閔丙奭及侍從院卿尹德榮ヲ率テ内殿ニ出
御セラレ先ツ統治權讓與ノ要旨ヲ宣示シ且條
約締結ノ全權委任狀ニ躬ヲ名ヲ署シ國璽ヲ鈐
セシメ之ヲ内閣總理大臣ニ下付セラル依テ内
閣總理大臣ハ其ノ携フル所ノ條約案ヲ上覽ニ

供シ逐條説明スル所アリ列席者孰レモ異議ヲ
唱フル者ナク皇帝ハ一々之ヲ嘉納シ裁可ヲ與
ヘラレタル趣當時參内セル國分秘書官ヨリ電
詰ヲ以テ詳細報告シ來レリ

同日午後四時ニ至リ内閣總理大臣李完用ハ農
商工部大臣趙重應ト共ニ統監邸ニ來リ本官ニ
對シ以上ノ顛末ヲ述ヘ且左記(譯文)全權委任
ノ勅書ヲ提示セリ

朕東洋ノ平和ヲ鞏固ニセムカ爲、日韓兩國ノ
親善ナル關係ニ顧ミ相合シテ一家トナルハ

相互萬世ノ幸福ヲ圖ル所以ナルヲ念ヒ茲ニ
韓國ノ統治ヲ擧ケテ之ヲ朕カ最モ信賴スル
大日本國皇帝陛下ニ讓與スルコトニ決シタ
リ依テ必要ナル條章ヲ規定シ將來ニ於ケル
我、皇室ノ安寧竝ニ生民ノ福利ヲ保障セムカ
爲、内閣總理大臣李完用ヲシテ大日本帝國
統監寺内正毅ト會同シ商議協定セシム諸臣
亦朕カ意ノ確斷スル所ヲ體シテ奉行セヨ
本官ハ之ヲ査閲シ其ノ完全ニシテ妥當ナルヲ
承認シ且時局解決カスノ如ク靜肅且圓滿ニ實

行セラルルハ雙方ノ幸福ニシテ最モ祝スヘキ
所ナル旨ヲ告ケ李完用ト共ニ日韓兩文ノ條約
各ニ通ニ記名調印セリ

李完用ハ茲ニ和氣靄然タル間ニ於テ此ノ大事
ヲ完成スルヲ得タルハ是レ全ク日本國 天皇
陛下ノ御威徳ニ依ルモノニシテ欣悦ノ至ニ堪
ヘス今一言微衷ノ在ル所ヲ述ヘタシトテ左ノ
三個條ヲ開陳セリ

一 國民授産ノ方法ニ付テハ特ニ注意ヲ煩
ハシタシ蓋シ其ノ宜ニ適スルト否トハ

國民ヲシテ永久ノ恩澤ニ悦服セシムル
ト否トニ關スレハナリ

二 將來王室ニ對スル待遇ノ厚薄ハ國民全
般ノ思想ニ影響スル所鮮少ナラスト信
ス

三 教育ニ關スル行政機關ハ總督府官制ニ
依リ決定セラルルコトナルヘキモ願ハ
クハ中央ニ局又ハ部ヲ存シ國民教育ニ
重キヲ措カルルノ意ヲ示サレタシ否ラ
サレハ將來劣等人種トシテ取扱ハルル

カ如キ感想ヲ起サシムルノ恐マルヘシ
本官ハ之ニ對シ國民ノ授産ニ付周到ナル注意
ヲ要スルハ勿論ナリ由來韓國ハ農ヲ以テ本ト
為スカ故ニ先ツカヲ其ノ發達ニ竭サムトス又
王室ノ待遇ニ關シテハ自分ニ於テモ至極同感
ナレハ帝國政府ノ注意ヲ促シ置クヘシ而シテ
國民教育ニ至テハ徒ニ中央機關ヲ夸大ニスル
モ實效ナクムハ益ナカルヘキニ依リ宜シク地
方ニ普及スルノ方法ヲ講スルヲ要ス但シ中央
ニ於テモ相當ノ機關ヲ設クヘキ考ナル旨ヲ答

ヘタルニ李完用ハ之ニ對シ満足ノ意ヲ表シ更
ニ趙重應ト共ニ德壽宮ニ赴キ太皇帝ニ時局解
決ノ顛末ヲ上聞スヘシトテ退出セリ
同日午後五時宮内府大臣閔丙奭及侍從院卿尹
德策再々統監邸ニ來リ本官ニ皇帝ノ宣旨ヲ傳
達セリ其ノ要ニ曰ク朕ハ今朝閔尹兩人ニ與ヘ
ラレタル統監ノ忠言ヲ諒トス朕ハ夙ニ世間ニ
傳播セル時局問題カ早晚解決ノ實行ヲ見ルニ
至ルヘキコトヲ豫想シタリ而シテ今ヤ即チ其
ノ機ニ達ス依テ朕ハ内閣總理大臣ニ旨ヲ下シ

圓滿ノ解決ニ必要ナル委任ヲ與ヘタリ内閣總理大臣ハ既ニ統監ト會同シ一切ノ要件ヲ結了シタリト信ス朕ハ自今國務ト相關スル所ナシ希フ所ハ我カ一家ヲ整理シ我カ宗室ノ祭亨ヲ永久ニ持續スルニ在ルノミ唯茲ニ統監ノ考慮ヲ求メムトスル一事アリ想フニ現今ノ宮内府ハ其ノ組織ニ於テ多少ノ變更ヲ免カレサルヘシト雖今俄カニ大改革ヲ加ヘラレ大ニ其ノ人員ヲ減少セララルルカ如キコトアラハ一般國民ノ感想ニ顧ミ又體面ヲ維持スル上ニ於テ憂慮

ニ堪ヘサルモノアリ日本國 天皇陛下ハ從來我々皇室ニ對シ深厚ナル好意ヲ表彰セラレ我々皇室ハ常ニ其ノ洪恩ニ感佩セリ將來ト雖朕ニ對スル日本國 天皇陛下ノ厚誼ハ敢テ渝ル所ナカルヘシト信ス歳費ノ如キモ今後尚ホ從前ノ定額ヲ供給セラルヘシト聞ク是ニ由テ之ヲ觀ルモ其ノ優遇ノ一端ヲ察スルニ餘アリ云々
本官ハ之ニ對シ過刻内閣總理大臣トノ間ニ條約ニ記名調印ヲ了セルコト竝ニ本問題カスノ

如ク靜肅且圓滿ニ解決セラレタルハ韓國皇帝
陛下カ東洋ノ平和ヲ永久ニ維持シ韓民將來ノ
幸福ヲ増進セムトセララルル宏量ナル襟度ニ依
ルモノト信スル旨ヲ告ケ且李王家ニ對シテハ
日本皇族ト同一ノ禮遇ヲ與ヘラルヘク而シテ
日本皇族ノ家制ニハ自ラ規定ノ存スルモノア
レトモ李王家ニハ直ニ之ヲ適用セラレスシテ
別ニ特例ヲ設ケラルヘク尚ホ皇帝ノ希望ハ本
官ヨリ其ノ筋ニ傳達スヘキニ依リ安心セラ
ル様上聞ニ達セラレタシト答ヘタルニ閔尹兩

人ハ之ヲ諒シテ退出セリ
併合ノ際ニ於ケル韓國軍隊ノ處分ニ就テハ持
ニ周到ノ注意ヲ加ヘタリ明治四十年八月韓國
政府カ地方駐屯ノ鎮衛隊全部及侍衛隊ノ大部
ヲ解散スルニ方リ非常ナル紛擾ヲ生シ其ノ解
散ノ命ニ服セスシテ強カテ以テ抵抗ヲ試ミ夕
ルモノアリ又解散兵ニシテ相率テ暴徒ニ投
シタル者亦尠カラス之カ爲メ施政上ニ多大ノ
影響ヲ及ホシタルコトアリ爾後韓國ニハ親衛
府、侍從武官府、東宮武官府竝ニ近衛歩兵大隊及

近衛騎兵隊ヲ存セリ李完用ハ此等ノ軍隊ヲ孰
レモ皇室守衛ノ任ニ當レルノ事情ニ鑑ミ或ハ
時局解決ノ進行上ニ障害ヲ醸スノ因タラムコ
トヲ慮リ之ニ對シ適宜ノ措置ヲ執ラレムコト
ヲ求メタリ之ヨリ先キ本官ハ俄カニ右等軍隊
ヲ解散スルノ必要ナキヲ認メ當分從前ノ規定
ニ依ルコトトシ其ノ現職ニ在ル者ハ駐劄軍司
令部又ハ駐劄憲兵司令部附ト爲スヘキ見込ヲ
以テ豫メ政府ト協議ヲ遂ケ置キタルニ依リ韓
國駐劄軍司令官大久保春野ニ旨ヲ傳ヘ右等韓

國軍隊ハ之ヲ解散セスシテ將來帝國軍隊ニ隸
屬セシムヘキカ故ニ叨リニ動搖スヘカラサル
コトヲ諭サシメ且常ニ其ノ行動ヲ監視シ萬一
ノ變ニ備フルノ用意ヲ爲サシメタルモ尚ホ親
衛府長官兼侍從武官長李秉武ニ對シ部下士卒
ニ於テ其ノ職守ヲ誤ルカ如キコトナキ様嚴戒
スヘキ旨ヲ注意シ置ケリ斯ノ如クニシテ韓國
軍隊ハ併合實行ノ前後ヲ問ハス始終謹慎ノ態
度ヲ持シテ規律ヲ嚴守シタリ併合後勅裁ヲ仰
キ舊韓國近衛步兵大隊ハ之ヲ朝鮮步兵隊同近

衛騎兵隊ハ朝鮮騎兵隊ト稱シ朝鮮駐劄軍司令官ノ隸下ニ屬セシメタリ

爾後舊韓國政府竝ニ統監府及所屬官署ニ代ハルヘキ朝鮮總督府ノ設置ニ伴ヒ施政機關ノ改廢按排ヲ爲シ中央ニ於ケル職員ヲ減シテ之ヲ地方ニ移シ一ハ以テ事務ノ簡捷ヲ圖リ更ニ又地方行政ノ振作ニ資セムコトヲ期シ經費ニ於テモ多少ノ削減ヲ決行スルコトニ努メタリト雖新舊變更ノ時期ニ方リ俄カニ急劇ノ改革ヲ爲スニ便ナラサルモノアリ漸ク追フテ改善ノ

實ヲ擧ケムトス幸ニ朝鮮總督府及所屬官署官制ハ勅裁ヲ蒙リ九月三十日ヲ以テ公布セシメラレ次テ職員ノ任命アリ各員勵精其ノ任務ニ盡瘁シ以テ聖明ノ宏謨ニ副ヒ奉ラムコトヲ期セリ

朝鮮上下ノ士民ニ至テハ皆悉ク皇化ノ德澤ニ浴シ優待寵遇ニ感奮セサル者莫シ大赦ノ恩典ヲ蒙レル者ハ其ノ本人ノミナラス親族隣里亦其ノ惠ヲ頒チ班族儒生ノ耆老ニシテ恭謙能ク庶民ノ師表タル者及孝子節婦ニシテ郷黨ノ

韓國併合ト軍事上ノ關係

模範ヲル者ハ共ニ褒賞ヲ賜ハリ殊ニ朝鮮十三
道三百二十八府郡ニ配與セラレタル臨時恩賜
金ハ直チニ士民ニ分與セシテ之ヲ各府郡ノ
基金ト爲シ之ヨリ生スル利子ヲ以テ授産及教
育ノ補助竝ニ凶歉救濟ノ資ニ充ツ朝鮮ノ士民
カ永久無限ノ聖恩ニ霑被スヘキハ本官ノ確
信シテ疑ハサル所ナリ

韓
總
督
府

韓國併合ト軍事上ノ關係

一、警察制度統一ト憲兵隊トノ關係

韓國ニ於ケル既往ノ状態ニ鑑ミ且ツ将来ノ
 趨勢ヲ慮リ本官就任ノ當初先ツ警察
 制度ヲ統一シ治安ノ保全秩序ノ維持ヲ
 適確ナラシムルコト極メテ緊要ナルヲ認メ此
 韓國憲兵ノ制度ヲ改正シ憲兵警察彼此
 統一機關ノ下ニ活動シ其業務ニ些ノ杆格
 ナキヲ期セリ即チ憲兵ノ編制ハ四十二年
 六月以前ニ於テハ本部及七隊人員約二十

明洋總督府

四百十リシモ韓国治安ノ任務ヲ實行スル
為ニハ人員寡少ナルヲ以テ六月ニ至リ十三
道ニ各一憲兵隊ヲ置キ人員約千ヲ増シ
巡查ト合シ主要ノ地点ニハ約方三里半ニ一
哨所ヲ置クコトトシ尚ホ鴨綠江及圖們江ノ
沿岸ニ護境哨所ヲ増置スルコトトセリ憲
兵増員ノ大部ハ八月十日迄ニ各道ニ到着シ
最後ニ到着セル約三百名ハ政変ノ時期ニ
應スル必要上京城警備ノ為一時京城ニ増
加配置ヲ為セリ尚ホ明治四十一年六月以降

韓國政府ノ募集シアル憲兵補助員ハ同政
府ノ委託ニヨリ我憲兵隊ノ指揮ヲ受クル
モノタリシモ四十三年六月ニ至リ更ニ一步ヲ進
メ勅令第三百一號ニ依リ憲兵補助員ハ全
然我憲兵隊ニ附属スルコトナレリ(當時ニ
於ケル憲兵補助員ノ數約四千ヲ計上ス)
之ト同時ニ憲兵將校ヲ以テ統監府警務
總長、警務部長及警視ニ憲兵准士官下士
ヲ以テ統監府警部ニ任用スルノ途ヲ開クニ
至リ憲兵ハ此使用ニ依リ同時ニ警務總監

部ノ吏員ナリ茲ニ憲兵警察ヲ
體同心トナレリ
如上ノ施設ヨリ全韓國ヲ通シテ統一指
揮下ニ整然トシテ警察業務ヲ遂行シ
特ニ保合前後ニ於テ極メテ靜平ニ治安
ノ實績ヲ奏スルヲ得タリ

二、韓國駐劄軍隊ノ警備配置

政変ニ際シ全韓國ナレテ些ノ騷擾ヲ醸ス
コトナラレテ平和ノ間ニ時局ヲ終決セシムルノ
必要ヲ慮リ暴徒ノ討伐及北關圖例江沿岸ノ

警備及首都ニ於ケル應急準備ノ爲六月中旬
ヨリ軍隊配置ノ異動ヲ行ヒ七月九日ヲ以テ全
部ヲ完了セリ即チ當時暴徒トシテ稍著明
ナルハ黃海道東北部並ニ江原道北部ニ於
テ蔡應彦ノ率フル一集團及姜基東ノ
徒党アリ圖例江對岸ニ於テハ間嶋及圖例
江下流方向ヨリ北關ニ侵入セント企圖スル李
範允ノ徒党及フノオキエフスケ附近ノ崔都憲
洪範道ノ率ユルモノ等アリ故ニ此等ニ對シ
其勢力ノ輕重及其危害ノ程度ニ應ジ地

韓 總 務 廳

方警備兵力配置ヲ変更シ京城附近ニ於
テ時局ニ際シ急ニ應ズル為該地附近ニ歩
兵十五箇中隊騎兵一聯隊(一中隊欠)砲兵
一中隊工兵一中隊ヲ集結ス

七月下旬本官韓國ニ到着セシ以來親シク諸
情報ヲ綜合シ時局發展ニ策應セシムル為
八月八日駐劄軍司令官ヲ招キ左ノ主旨ヲ以
テ軍部ニ對スル要來ヲ開陳セリ

一 主要ナル大目的ヲ果スル時機ニ際シ故意差クハ
偶然ニモ地方ニ於テ暴徒輩賊ノ保登スル

コトアラムカ之レ極メテ遺憾ノ事ニ屬スルヲ
以テ各地方ニ在ル現在守備隊ハ其全力ヲ
盡クシテ事前ノ豫防及警戒ヲ一層嚴密
ニスルヲ要ス

二 京畿道、黃海道、江原道等殊ニ比較的京
城ニ近キ地方及從來暴徒ノ屢々行動シ
タル地方ニ在リテハ周密ナル偵察勤務ヲ
相待テ努メテ現時主魁ノ陰匿シテリト認
ムル地方ノ取締鐵道沿線並京城ニ通ス
ル道路ノ警備ニ關シ特ニ一層ノ努力ヲ

明 洋 總 督 府

以重警之 蹉跌ナキナ期スルヲ要ス
三右等實行ハ常ニ憲兵警察ヲ相提携協策
應ニ首都ニ於テ政変ノ生スヘキ豫想時
期以前ニ其ヲ備ヘ移ルヲ要ス但シ其
實施ニ於テ騷擾ヲ豫防スルヲ主トシ之
ヲ煽テ却テ不良ノ結果ヲ生スルハキ或
ハ人民ヲ以テ政治的變動ノ前提タル感
ヲ起サシムルノ行動ヲ戒ムルヲ要セトス
右ニ對シ軍隊ノ準備行動ハ嚴密ニ其目的
ヲ秘シ直ニ實施スヘキヲ要求セリ

三 京城ニ於ケル警備

政変ニ際シ京城警備ハ最モ緊要ニシテ極
メテ周密ナル手配ヲ要スルハ他言ヲ待タス
故ニ本官著任スルヤ直ニ軍司令官ノ警備計畫
ヲ徹ニ更ニ親シク之ニ関スル意見ヲ指示シ
且ツ寸毫ノ遺漏ナカラシムル為再三調査研究
ヲ反覆セシメ八月初ニ於テ軍司令官ハ京
城龍山警備規定ヲ定ム而シテ之ヲ實施スル
狀況ニ應ニ必要ト認ムル時ニ於テ本官之ヲ軍
司令官ニ指示スルコトトセリ蓋シ兵力ヲ使

明洋總督府

警備總督府

用スルハ萬止ムヲ得サルノ時機ニ應スルモノニシ
テ憲兵敬憲ノ力ヲ以テ京城ノ警備ニ任ス
ルヲ以テ第一義トセリ然レモ何レノ時何レノ
場合ヲ論セス一令ノ下ニ於テ苟モ機ヲ失ス
ルコトナカラシムル爲七月下旬以降京城龍
山ニ在ル諸隊ハ其兵營ニ於テ當時空ニ武
裝ヲ整ヘアリ、
政変ニ際シ韓國軍隊ノ首擡ハ帝ニ駭擾ノ
發動タルコト過去ノ歴史ニヨリテ明ナリ故ニ
豫メ之ニ備フルノ必要アリ然レモ從來ノ經過

ヲ見ルニ皇帝ニ其手段ヲ欠キ爲ニ駭擾ノ端
ヲ開キタルモノノ如シ此ニ於テ兵力ヲ以テ之ヲ
威壓スルヲ最後ノ手段トシ先ツ彼等ニ如
何ナル政変ニ際シテモ生活ノ途ヲ失ヒ不幸
ノ境過ニ沈淪セシメザル事ヲ明言シ若シ駭
擾事ヲ醸スニ於テハ却テ口ヲ不幸ノ境過
ニ陥ルモノタルノ理ヲ了解セシムルヲ以テ第一着
ノ手段トシ軍司令官及軍務監督ノ我將校
ヲシテ豫メ暗々裏ニ其意志ヲ傳達セシ
メ時局ノ展展以前ニ於テ略ホ軍隊ノ向背

及其態度ノ靜穩ニ導キ得ルコトヲ確保シ
得タリ然レニ尚ホ韓國軍隊下士兵卒ヲ
レテ人民ニ親炙セシムルハ禍根ヲ惹起ス
ノ虞アルヲ以テ八月以降ハ全然營外外出
ヲ禁シ外部トノ交通ヲ杜絶シ暗ニ監督
ヲ嚴密ナラシムルノ手段ヲ盡セリ
曰、保合談判開始後ノ狀態
談判ノ開始及其經過ハ絶對ノ秘密ヲ保持
シ憲兵警察ノ警備ノ周密ト相待テ何
等騷擾ノ余地ナク談判ノ終結ヲ見ルニ至ル

此ニ於テ韓國軍隊ハ特ニ李秉武ヲシテ旨ヲ
含メテ説諭ヲ加ヘシム然ルニ軍隊ハ保合條
約發布ヨリ依然軍隊ノ存在ヲ認メラレ
自己ノ境遇ニ何等ノ変更ナシ生セサル寛大
ノ處置ヲ務メ注意ヲ加ヘテ監督慰撫シタル
トハ効果ハ些ノ不安ノ念ヲ生セシメス從ツテ
動搖ノ素因ヲ醸スコトナク此ニ靜穩ニ悅服
シテ從前ノ如ク股勢ヲ續行スルニ至レリ
談判ノ經過圓滿ニ進行シ萬一ヲ顧慮シタ
ル警急配備ノ規定モ之ヲ現實スルノ必要

ヲ認メス又獨リ京城ノミナラス地方ニ於テ
モ極メテ平靜ニシテ暴徒ノ俾發ヲ見サル
ハ大ニ慶スヘキコトナリ然レモ一面ニ於テハ軍
隊警察ノ威カト不断ノ警備ハ間接ニ多
大ノ効力ヲ示レタルハ亦爭フヘカラサル事
實ナリトス

拓秘受第五六一號

別紙國語學校教授木林本修清
國應聘繼續屆書及進達候也

明治四十三年十二月二十六日

拓殖局總裁候爵桂 太郎

内閣總理大臣候爵桂 太郎殿